

特別講演

主催 埼玉医科大学 総合医療センター 麻酔科, 後援 埼玉医科大学 卒後教育委員会
平成18年12月14日 於 埼玉医科大学 総合医療センター 第2会議室

What's New in Obstetric Anesthesia

William Reid Camann, M.D.

(Director of Obstetric Anesthesia, Department of Anesthesiology,
Perioperative and Pain Medicine, Brigham and Women's Hospital
Associate professor of anesthesia, Harvard Medical School, Boston, USA)

演者の紹介: 講演者のCamann先生は、ハーバード大学関連教育病院であるBrigham and Women's Hospitalの産科麻酔部門の主任で、同病院は年間1万件以上の分娩数を誇っている。昨年は米国産科麻酔学会 Society for Obstetric Anesthesia and Perinatology (SOAP) の会長を務めるなど、産科麻酔における第一人者の一人である。分娩と麻酔研究会に招待されて来日された機会に、かつてレジデントとしてCamann先生の指導を受けた照井の在籍する当センターでの講演が実現した。

講演内容: 講演の前半では、産科麻酔の最近の話題と題して、特に硬膜外無痛分娩をめぐる議論について最近の知見を紹介した。米国で硬膜外無痛分娩が広く行われていることを背景に、硬膜外無痛分娩により帝王切開が増えるかどうか全米のメディア関心を集めている。これに対して、後ろ向き研究、カタストロフ分析、無作為試験、さらにはメタアナリシスの結果をふまえて、硬膜外無痛分娩を分娩早期に開始しても帝王切開は増えないと結論した。米国産婦人科学会ACOGが公式声明として、任意の子宮口開大まで硬膜外無痛分娩の開始を遅らせる必要はないと述べていることを紹介、無痛分娩を希望する女性には励ましとなる話であった。その他、硬膜外無痛分娩中に見られる母体の発熱が児に悪影響を及ぼすのか、硬膜外無痛分娩は母乳育児に悪影響があるのかなど、硬膜外無痛分娩に対するバッシングに一つ一つ答えを示した。

後半のトピックは、薬物によらない分娩鎮痛法である。水中出産や催眠鎮痛法、腰部皮下注入法などを豊富な写真やエビデンスと共に紹介されたが、これらの方法が大学病院でも提供されていることは驚きであった。これらの薬物によらない分娩時鎮痛法は、硬膜外鎮痛法と対立するものではなく、産婦のさまざまな要求に応え、お産の満足度を高めるために、組み合

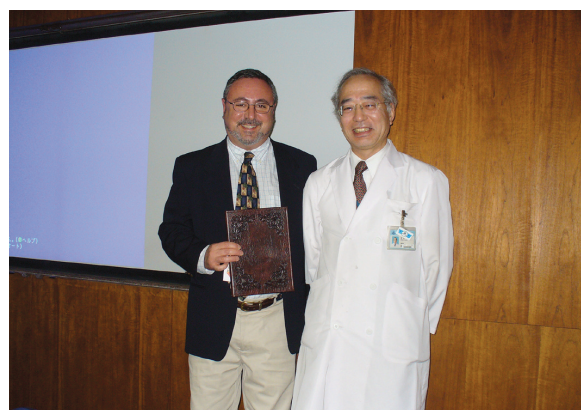


写真. 講演後に総合医療センター麻酔科宮尾秀樹教授より感謝状を贈呈。

わせて使っていくべきものであることを強調されて講演を締めくくった。

講演後の質疑応答では、お産の痛みを和らげることが本当に必要なのか、取り除くことによる母児関係への悪影響がないのかとの質問が出されたが、そのような文化的背景に由来する質問は理解できるとの答えに留まった。また、蒸留水皮下注法への興味が出された。

会場の参加者は、麻酔科医、産科医に留まらず、総合周産期母子医療センター産科病棟看護師や助産師、助産専攻科の教員と学生、さらには医学部学生5名も、平日夜の講演にもかかわらず参加いただいた。講演者と参加者全員で記念写真を撮影して盛会理に講演会を終了した。

最後になりますが、本講演を後援して下さった卒後教育委員会と、お集まりくださった皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

(文責 照井克生)